

水産部門では、つくり育てる漁業や水産資源の評価・変動予測、内水面での養殖・海洋・漁場環境モニタリングの実施と、効率的漁業生産技術の試験・研究に取り組んでいる。

# 未来を開く

青森産技センター報告

—48—

しかし、水産業を取り巻く環境は厳しく、沿岸漁業における漁業者の高齢化の進行や遠洋・沖合漁業における漁船

## 水産部門

# 資源減、代替漁業を試行



定置網で大量に漁獲されたサワラ



蛍光標識を付けて放流されるウナギ種苗

## 「栽培」の魚種開発模索

の老朽化の進行など水産物の生産体制が脆弱化。さらに、海洋における地球温暖化の影響や操業に支障を及ぼす大型クラゲなどの来遊の影響も懸

念されている。

本県の漁獲量は、1988年の84万トンをピークに減少を続け、2015年は25万トんでピーク時の3割程度にまで落ち込んでいる。ブリやアジなど漁獲が増えた魚種もあるが、マイワシ、スルメイカ、

サワラは鮮度の落ちが早い

（水産総合研究所企画経営監 佐藤晋一）

サバなどは大きく減った。国をまたいで回遊していると考えられるクロマグロの数も著しく減少しており、国際的な資源管理の必要性が認識されて漁獲規制が行われるようになってきた。本県でも漁獲日数を減らすなどの規制が行われている。水産総合研究所では、日本海海域で行われているマグロはえ縄漁業の代替漁業として、近年漁獲が増えてきたサワラを代替を保持したまま水揚げすることを目指した試験を開始した。

ため安価で取引されている。そこでマグロ漁師にサワラを釣ってもらい、血抜きの方法など鮮度が落ちない工夫をしてもらおうという試みだ。

新漁業の開発に加え、ヒラメやアワビなどで行っている稚魚や稚貝を生産して放流する栽培漁業については、マコガレイやキツネメバルなど新たな魚種の生産技術開発に取り組んでいる。

内水面漁業関係では、ウナギの資源保護を考える上で重要と考えられている「汽水ウナギ」が漁獲される小川原湖において、その分布・出現状況および生物学的特性を把握するための研究を進めている。県内で増えているカワウの生息・繁殖状況を調査し、淡水魚類や養殖魚への食害軽減を図る取り組みも開始した。

東奥日報 平成29年3月17日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。